

# 東北紀行

## Tohoku Travelogue

第8号/2016年6月/編集:宮原育子(宮城学院女子大学)

### 2年度目を迎えた東北支部

支部長 丸岡 泰 (石巻専修大学)

東北支部が発足して1年あまりが経過しました。ヒトで言えば、やっとよちよち歩き、というところですね。ここまで支部関係者が活動を継続し2年度目を迎えたことをまずは喜ぶと思います。

思い起こせば、2011年3月の東日本大震災後の同年7月、日本観光研究学会の横山秀司会長(当時)と理事の一行が東北視察を実施しました。翌年11-12月には第27回全国大会が宮城県で開催されました。その後の常務理事会、理事会、総会で東北支部設立の手続きが円滑に進みました。東日本大震災がきっかけで学会の東北への関心が高まり、支部設立を後押しする力になったと言ってよいと思います。もちろん、この間、東北の会員が支部設立に向け力を合わせてきたことも事実です。

当初は会員数の少ない東北で支部の設立と活動継続が可能か心配しました。東北と一口に言っても広く、会議と研究会のために人が集まる事も容易ではありません。昨年度は研究会、研究大会等を開催しましたが、仙台市での支部総会と盛岡市での研究大会を除くと集まれる会員の数は限られています。とくに、会場へのアクセスが良くないと参加者が少なくなるのが実情です。

このような支部活動の空間上の制約を緩和してくれるのは、活字情報の交換だと考えています。この『東北紀行』が支部活動の情報発信・活性化のために担う役割は小さくありません。昨年度以降開催された研究会等の概要はこれに記載・公開されておりますので、会員の研究のヒントになると思います。テーマとして幅広い観光の研究よりも東北復興関連のシェアが高いことには、現在の東北支部会員の関心の反映として、ご理解をいただきたく存じます。

今年度も研究会等の様子をこの媒体を通じて発信していきますので、ご支援よろしく願いいたします。

### 1. ジオツーリズムとは何か

まず、ジオツーリズム (geotourism) の geo は、geology (地質学)、geomorphology (地形学)、geography (地理学) の geo であって、「大地の、地球の、地理(学)の」を意味し、その対象は、geopark (大地の遺産公園)、geosite (ジオサイト)、Geotop (ゲオトープ) である。

ジオツーリズムの発生の経緯を見てみると、ドイツでは1970年代後半から貴重な Biotop (生物の生活域) を保護する動きが見られるようになったが、やがて貴重な Geotop (地質・地形) の保護へと広まった。そして、ドイツの各地に見られたテーマに沿った教育小道 (Lehrpfad) を、Geotop を学ぶジオ小道 (Geophad) として設置する動きもあらわれた。このような流れの中で1994年にアイフェル地方のゲロールシュタインに初めてジオパークが誕生した。その後、ジオパークの開設は、ドイツのみならずヨーロッパに広まった。

### 2. ジオツーリズムの定義

ジオパークや Geotop を訪問し、地形・地質の成り立ちや特徴を学ぶことがジオツーリズムということになる。その定義を初めて明らかにしたのは Hofmann & Schönlaub (1994) であり、彼らは「ジオツーリズムとはフィールドにおいて、地層だけではなく、景観の発生までの総合的な環境を含めた地球科学的現象を伝える観光」であるとし、ジオ小道とジオサイトの解説板の設置を重要視した。また、Hose (1995) は「単なる美的な鑑賞眼のレベルを超えて、観光客にある場所の地質と地形の知識と理解を獲得できるようにする案内とサービス施設の提供」と定義した。一方、National Geographic Society は、ジオツーリズムを「ある場所の地理学的特徴 - その環境、遺産、審美性、文化、住民の健康 - を維持し、向上させるツーリズムの形態」と定義し、ジオツーリズムを幅広く捉えようとした。しかし、Megerle (2008) はこの定義は「余りに広いので危険をはらんでいる」と批判し、Newsome & Dowling (2006) も、「ジオツーリズムの 'geo' の部分は、地質学と地形学、景観・地形・化石床・岩石・鉱物などの自然資源と関係しており、そのような特徴を造ったか、あるいは造りつつあるプロセスを正しく理解することに主眼点がある」と論じ、ジオツーリズムは「明らかに自然地域の観光分野であって、幅広い文化的遺産の構成要素を含

んだ観光でも、野生生物に焦点を当てた観光でもない」と指摘した。

すなわち、ジオツーリズムは、特異で貴重な地質と地形などからなる地域特有の景観（ジオランドスケープ）、ジオトープ、ジオサイトを保全し、それを損なうことなく観光資源として持続的に活用することであり、また学校教育・生涯教育に資する観光であり、環境に優しい観光（ソフト・ツーリズム）である。

### 3. ジオツーリズム、グリーン・ツーリズム、エコツーリズムとの相違

しばしば、グリーン・ツーリズムやエコツーリズムの用語を混同して使用される場合があるが、ジオツーリズムを加えて、それらの概念を明確にしておきたい。

グリーン・ツーリズムは、ヨーロッパでは**環境に優しい観光**という広い意味を持った観光・保養スタイルである。単なる農村観光，農家民泊ではない。

エコツーリズムは、生物生態系が損なわれていない貴重な地域・土地（ビオトープ）を訪問し、地域の環境・社会・文化に影響を与えることの少ない、**環境に優しい観光**である。地域に経済的利益をもたらし、それを地域住民の生活と自然保護に役立たせる。

ジオツーリズムは、地生態系が損なわれず、地域特有の景観が残る地域・土地（ジオサイト・ジオトープ）を訪問し、地域経済と学校教育・生涯教育に資する観光である。

### 4. ジオパーク、ジオツーリズムの現状

2004年に32ヶ国によってユネスコのなかに世界ジオパークネットワークが組織された。ユネスコが認定した世界ジオパークは、2015年9月現在120ヶ所ある。ユネスコのジオパークのガイドラインは「大地の遺産」を保全し、それを研究・教育・普及に活用する。さらにジオツーリズムを通じて地域の持続可能な発展に活用することを目的としている。

### 5. ジオツーリズムによる地域おこし

ヨーロッパのジオパークは、地域経済の発達が遅れた農村地域に設置されたところが多い。それは地域における大地の遺産を観光資源化し、ジオツーリストを誘致することによって、新しい産業と雇用が生まれ、人口減少に歯止めを掛けられるからである。

地域での消費をもたらすものとして、ジオパーク内での飲食、宿泊、ジオサイトの解説が載せられたガイドブックや地図の販売、さらにジオパークに関連したジオ製品の製作・販売（例：）などがある。特にジオ製品は、地域の製

JITR(Japan Institute of Tourism Research)-Tohoku品で製作すること、地域の地質・地形学的遺産のシンボルであること、営利を目的とし教育ツールであること、地球に優しい製品でなければならないと Farsani et al. (2012) は強調している。このようなジオ製品の一例として、アンモナイトの形のパンやチョコレートあるいはロウソク、恐竜の形をしたパン、三葉虫の形をしたケーキ、ジオ・ピザなどがジオパークで販売されている。

また、ドイツ、オーストリアなどではジオパーク域内のホテルやレストランは、パートナー企業として登録し、ジオパークへの訪問者を積極的に受け入れており、ジオツーリズム活動に協力する体制が見られる。それは、ジオパークのパートナー企業としての認証を得たら、ジオパークのパンフレットやガイドブックに第1級のホテルやレストランであるとして記載され、各ホテルやレストランはジオツーリストを歓迎するというシステムである。このことは、わが国において地域おこしとしてジオツーリズムを推進しようとしている市町村にとって参考になるのではないかと考える。

### 6. わが国におけるジオツーリズムの現状

わが国では2007年に13の市町村が日本ジオパークネットワークを設立したのに始まる。2009年8月には、洞爺湖・有珠山、糸魚川、島原半島がユネスコの世界ジオパークネットワークへの登録が認められ、世界ジオパークの認証を得た。2015年現在わが国には、世界ジオパークがアポイ、隠岐、山陰海岸、室戸、阿蘇を加えて8ヶ所、日本ジオパークが39ヶ所ある。

わが国におけるジオツーリズムの発展の可能性はあるのだろうか。わが国には、恐竜・動植物などの化石産地、火山地形、氷河地形、海岸地形、カルスト地形などのジオサイト、また、活断層地形、地滑り地形、火砕流堆積地など地形形成プロセスを示すジオサイトなど、多様なジオ遺産、ジオランドスケープが存在すること、近年、地旅や着地型観光など地元の観光資源の発掘・商品化の動きが活発であること、さらに体験型旅行の需要が増大し、団塊世代を中心とした観光の多様性、知的好奇心を持つ人が増大していることを考えれば、わが国におけるジオツーリズムの発展の可能性は大きい。

\*2016年5月15日仙台市講演要約。詳細は横山秀司編(2014)『ジオツーリズム論—大地の遺産を訪ねる新しい観光』(古今書院)を参照。同書は本年、第9回日本観光研究学会賞観光著作賞(学術)を受賞した。